

住友四百年

義
意

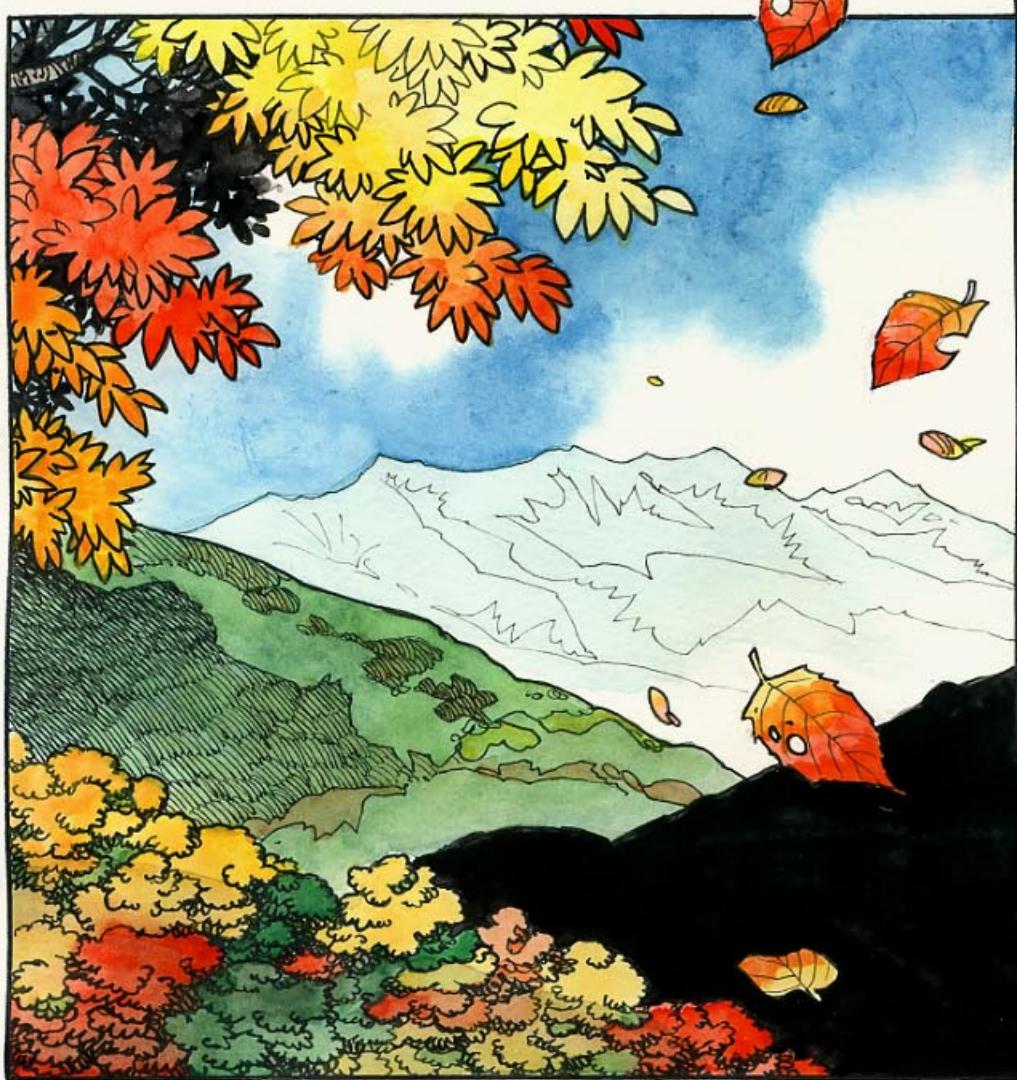


第六話 「泉屋は負けず」

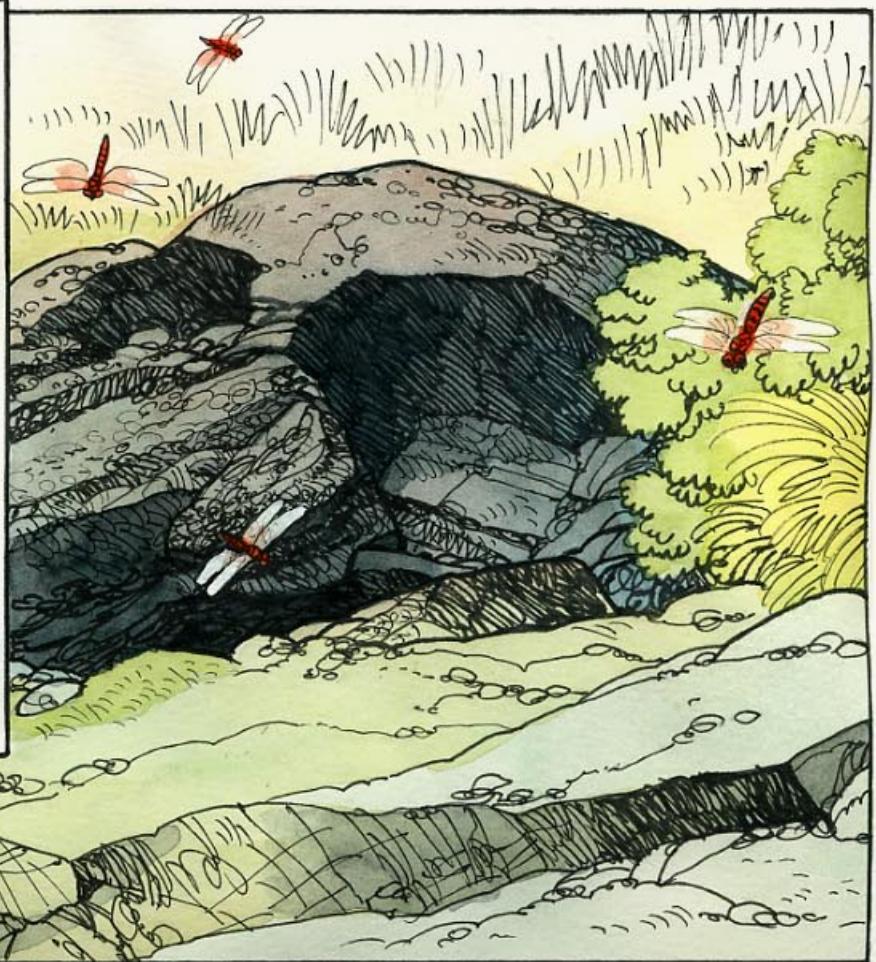
作: 西ゆうじ 画: 長尾朋寿

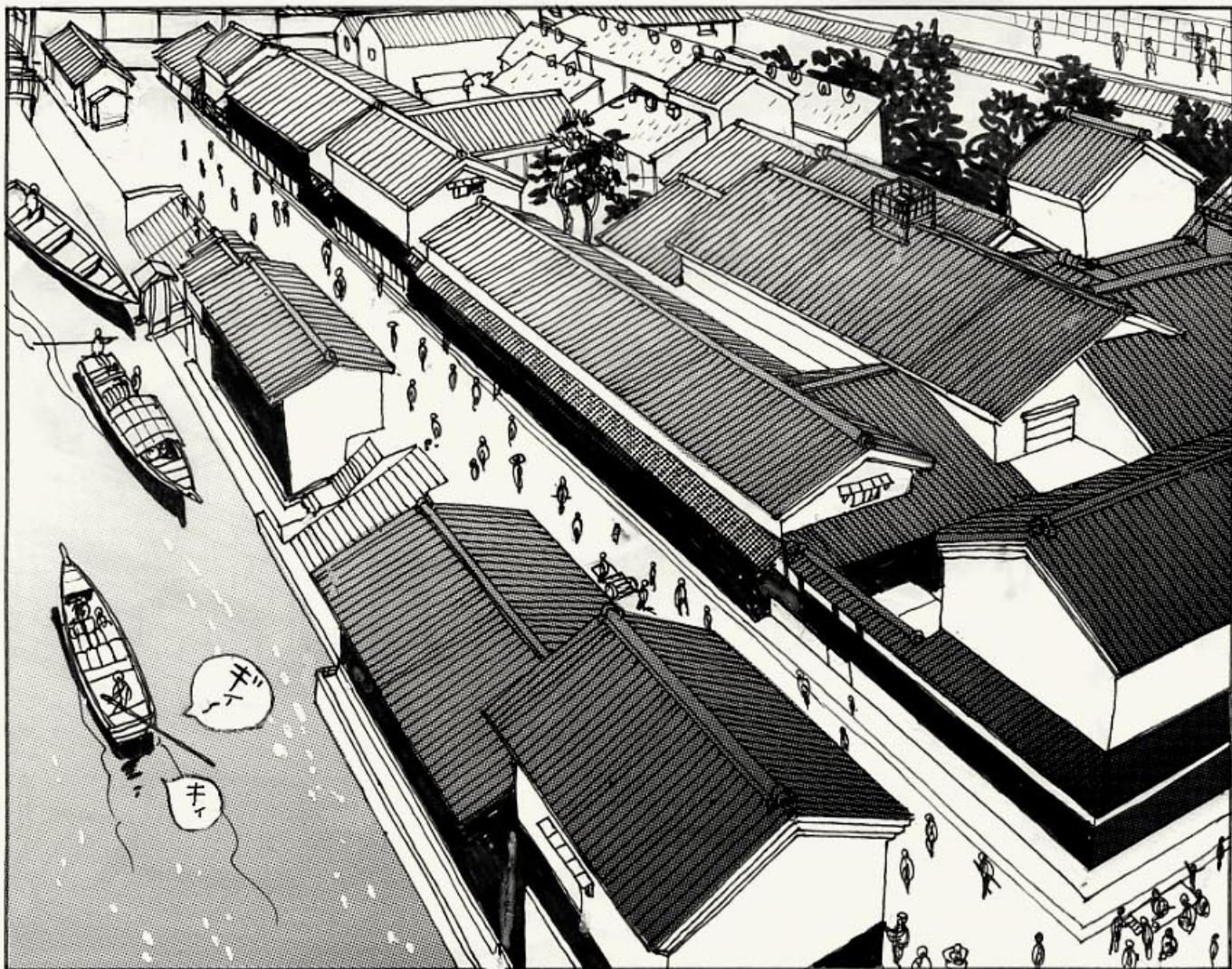
◎この作品は、住友の歴史を参考にして創作された物語です。

元禄三年（1690）九月。
泉屋住友は、伊予（現・愛媛県）の
別子に銅山を見つけ出すことが
出来ました。



しかし、すぐに稼業することは
出来なかつたのです。
その地は天領・幕府領であつた
からでござります。
また、側には西条藩の長谷坑
(当時の呼び名、後の立川鉱山)
あつたからでござります。





噂やと他にも
あの別子の山には
銅があると、狙うてる
ところがおますそうです。

旦さん。すぐに
幕府に稼業を
願い出ましょう。





この住友初代…文殊院様も、
元々は越前丸岡の武家の
出でおます。

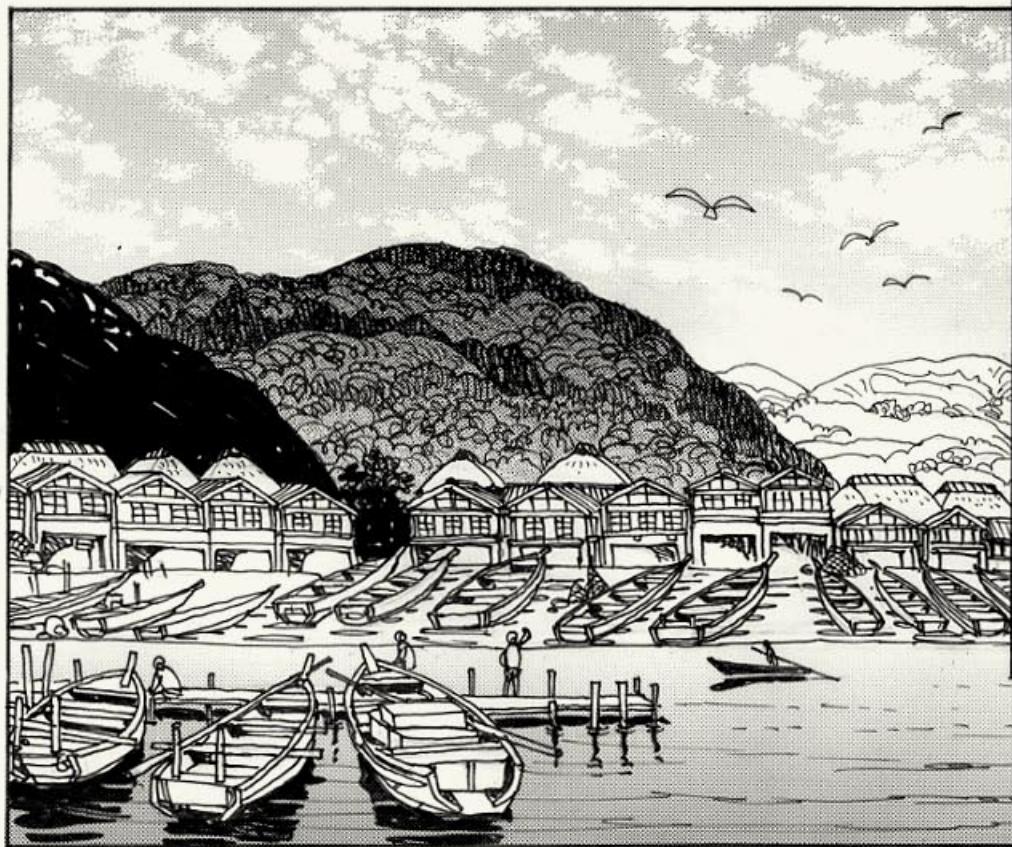
私はその文殊院様に
成り代わって、
重右衛門どんに
おむすびを握るんどすえ。

この泉屋を守り
繁栄させることは、
みんなを幸せへ
導くことやさかいな。

誰か手伝うてんか
伊予に取つて返す
重右衛門どんに
おむすびを
持てるんやあ。

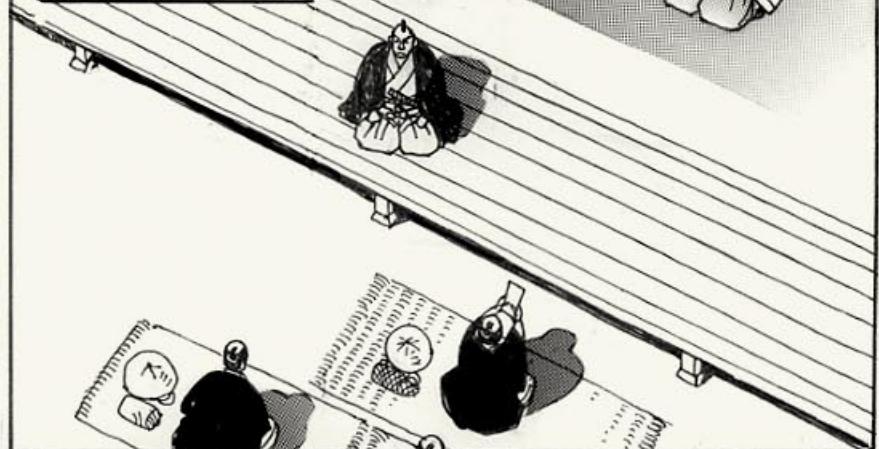
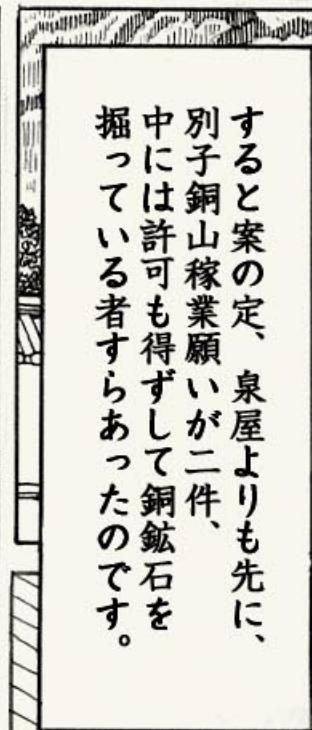
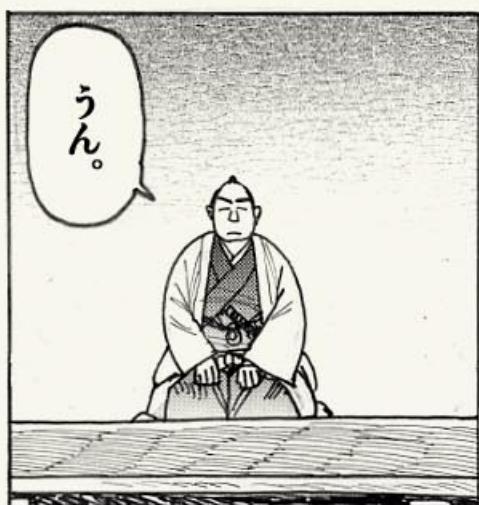
おおきに
ご隠居はん。

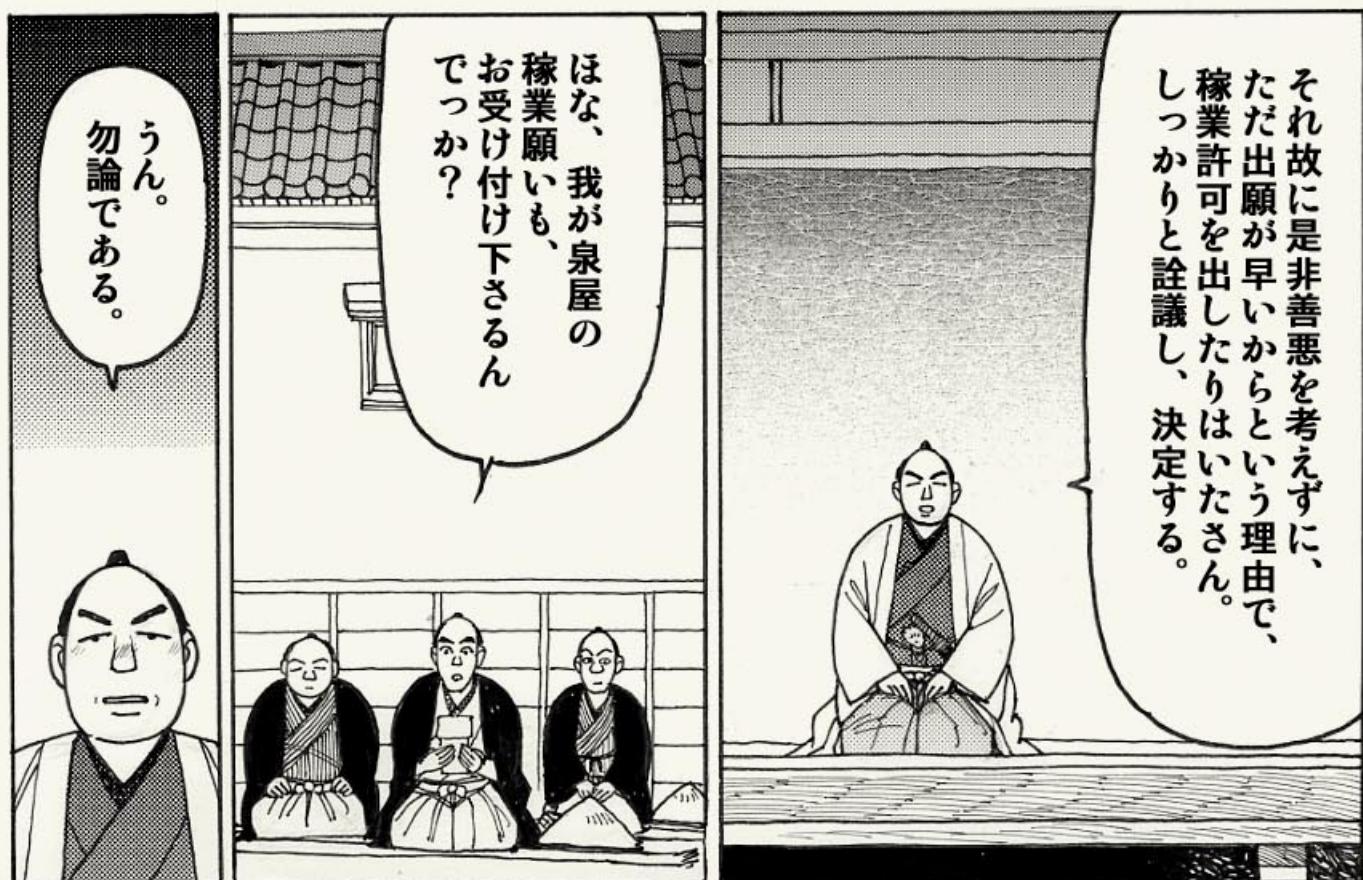
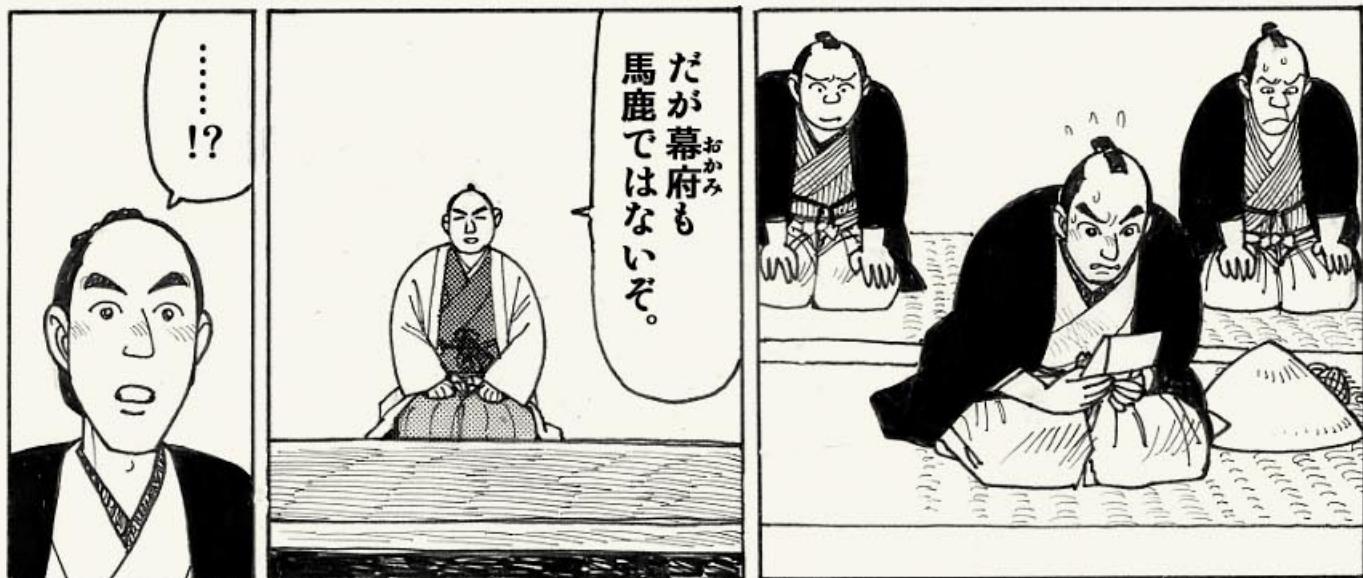
手代の重右衛門は、すぐさま
伊予川之江の代官所を通じて、
幕府へ別子銅山の稼業を
願い出ました。



やはり泉屋より先に
稼業願いを出された
方が二人も
おられたのですか、
代官様？

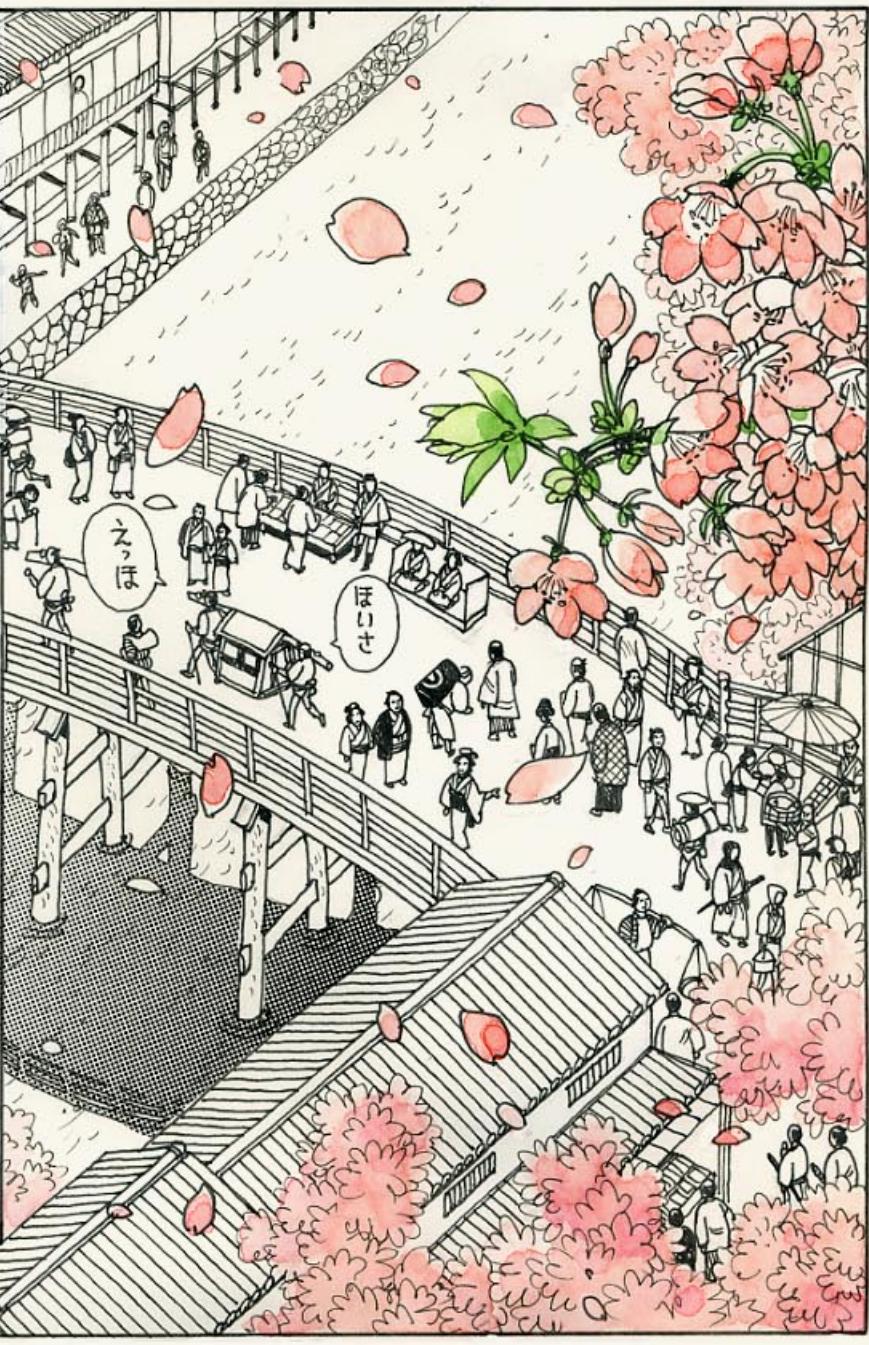
すると案の定、泉屋よりも先に、
別子銅山稼業願いが二件、
中には許可も得ずして銅鉱石を
掘っている者すらあつたのです。







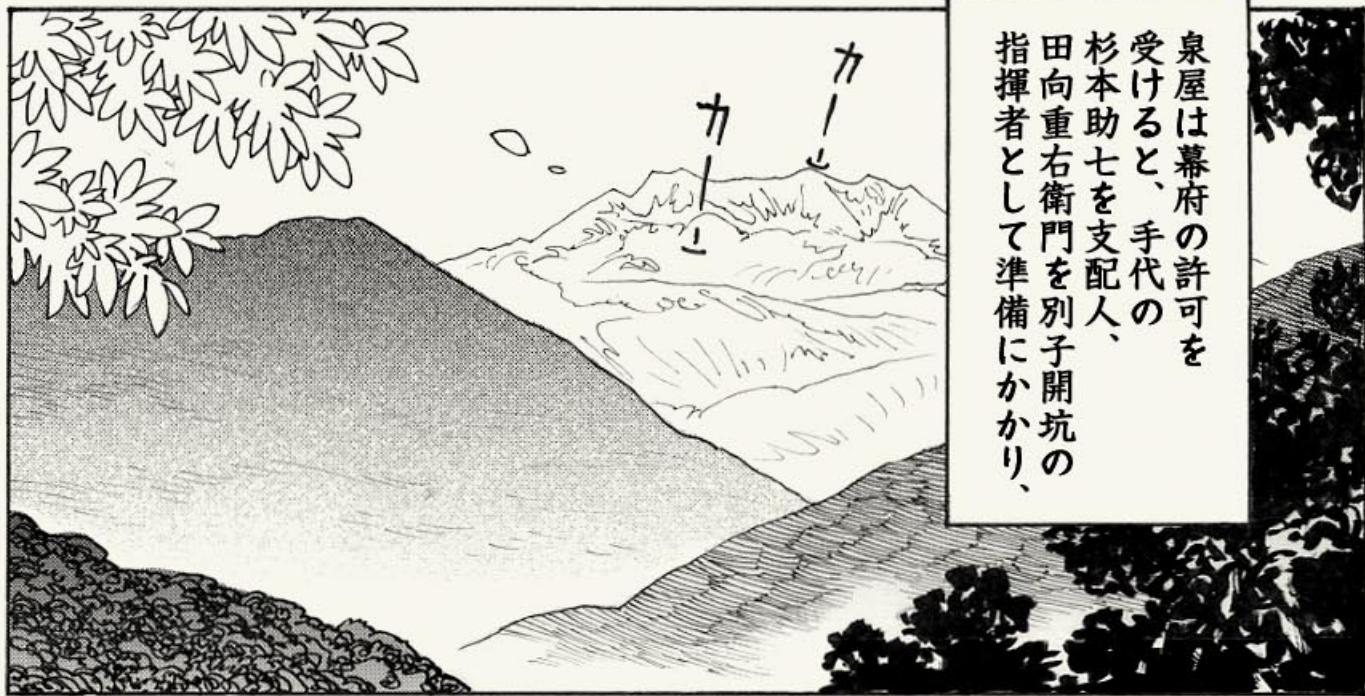
その結果、
翌年元禄四年（1691）二月、幕府は
泉屋の申し立ての運上（商・工・漁・
運送業者等に課した税）が少ないから、
少々増やした稼業願いに改めるようの
下命を下され、泉屋は同年四月に改めて
稼業願いを出したのでございます。



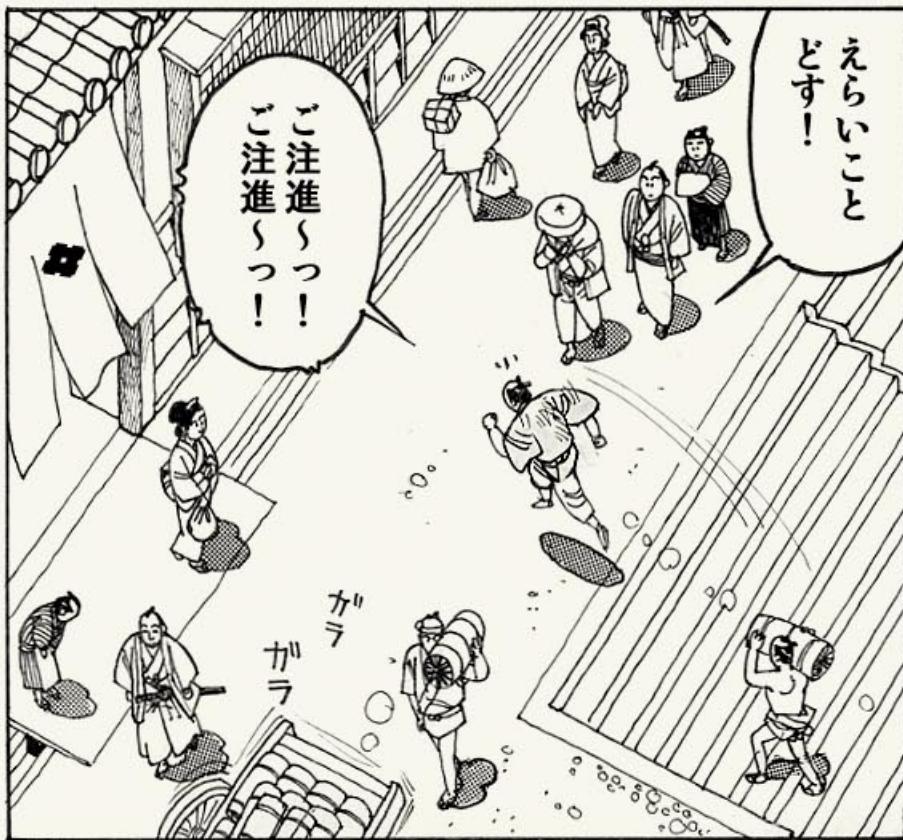
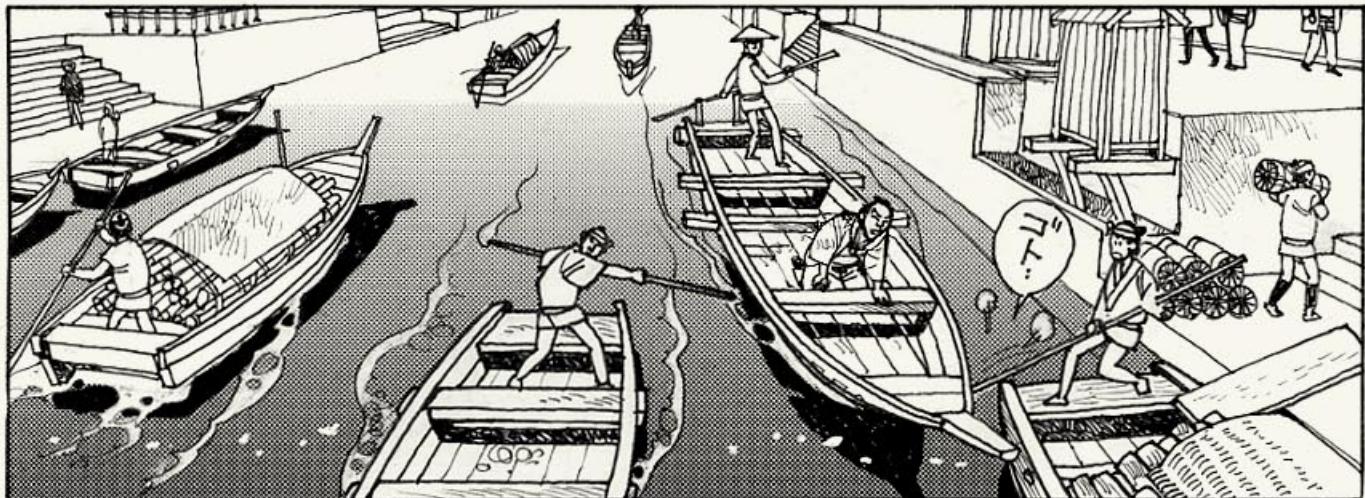
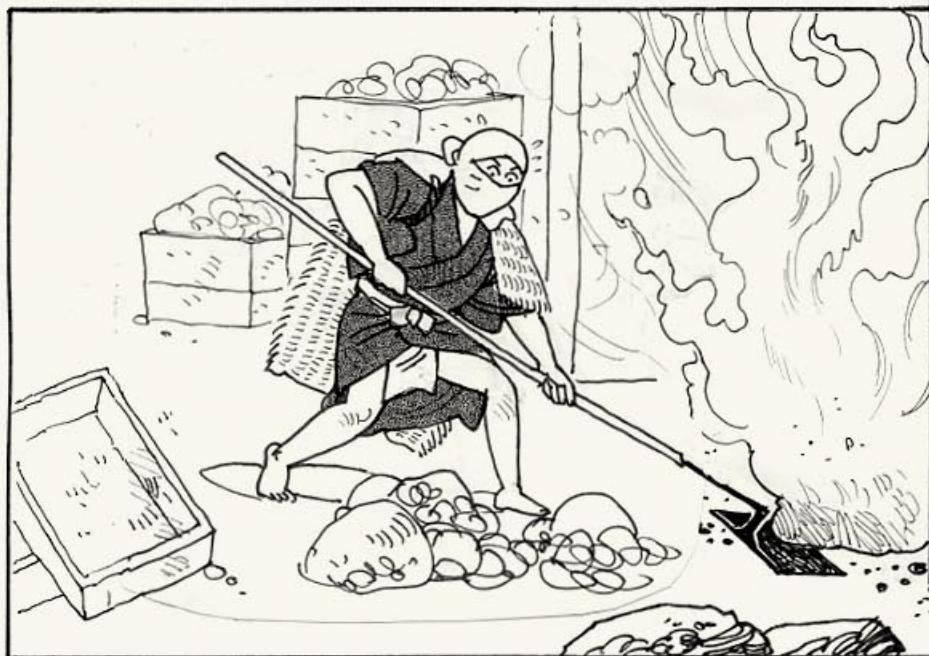


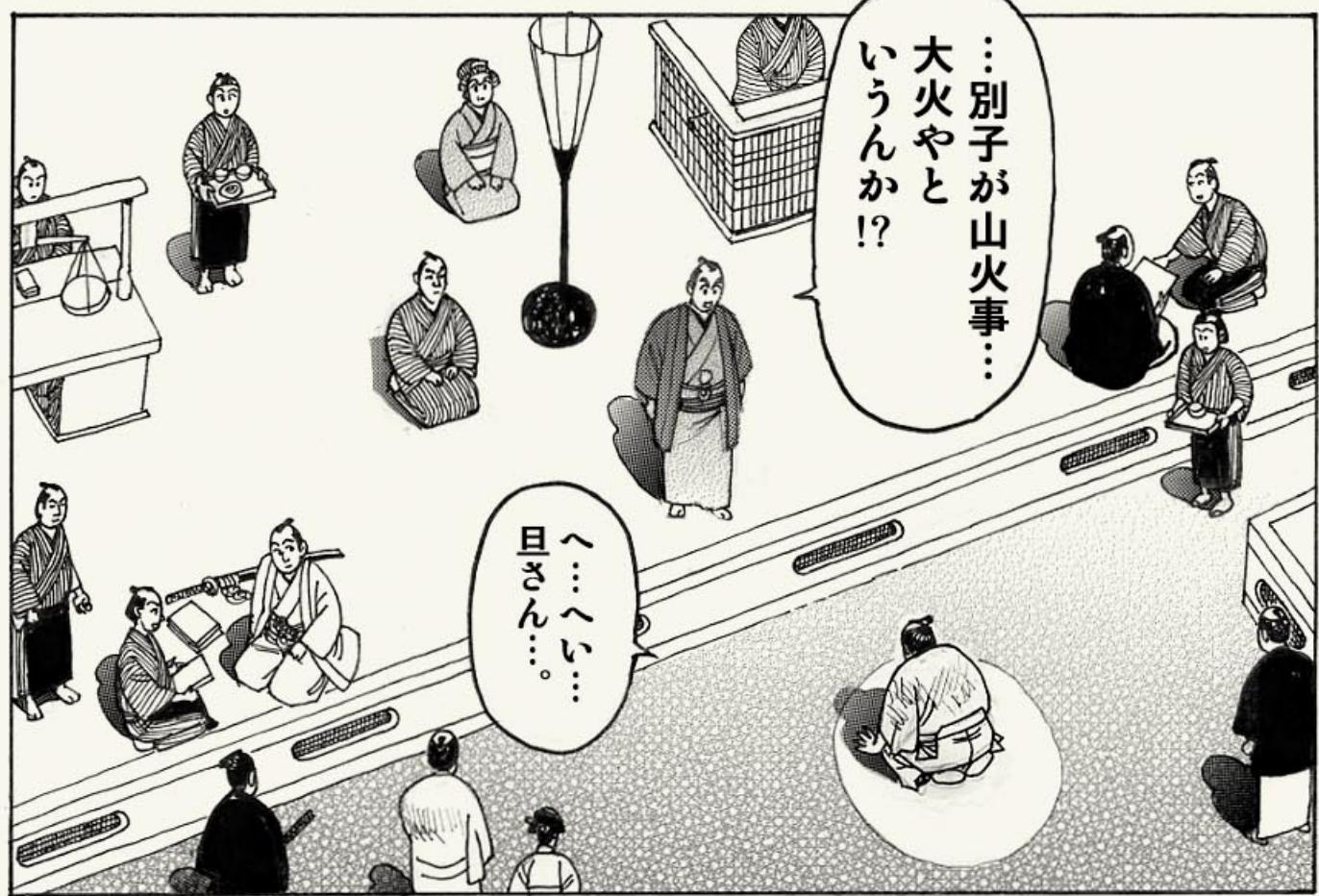


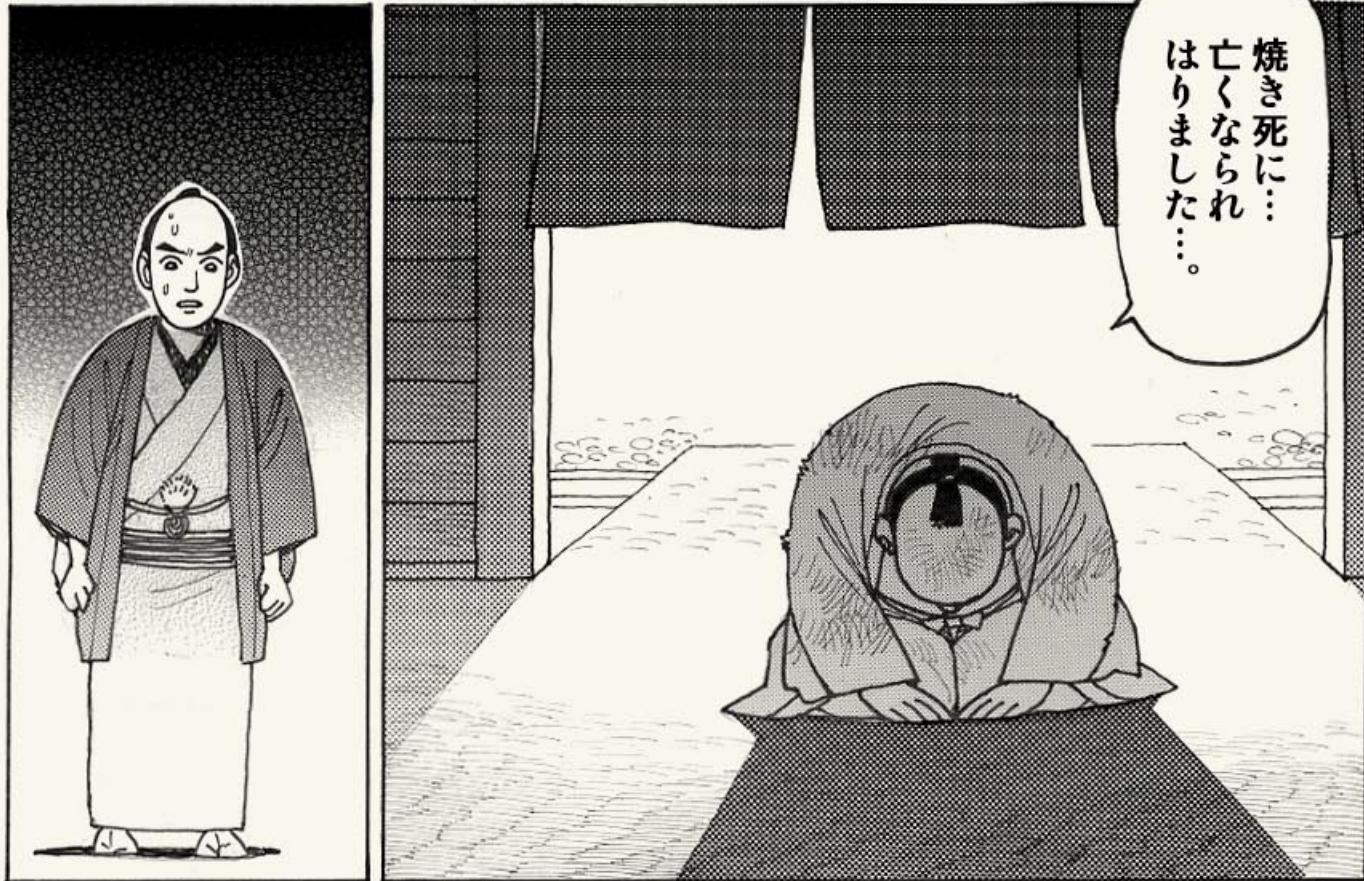
泉屋は幕府の許可を受けると、手代の杉本助七を支配人、田向重右衛門を別子開坑の指揮者として準備にかかり、

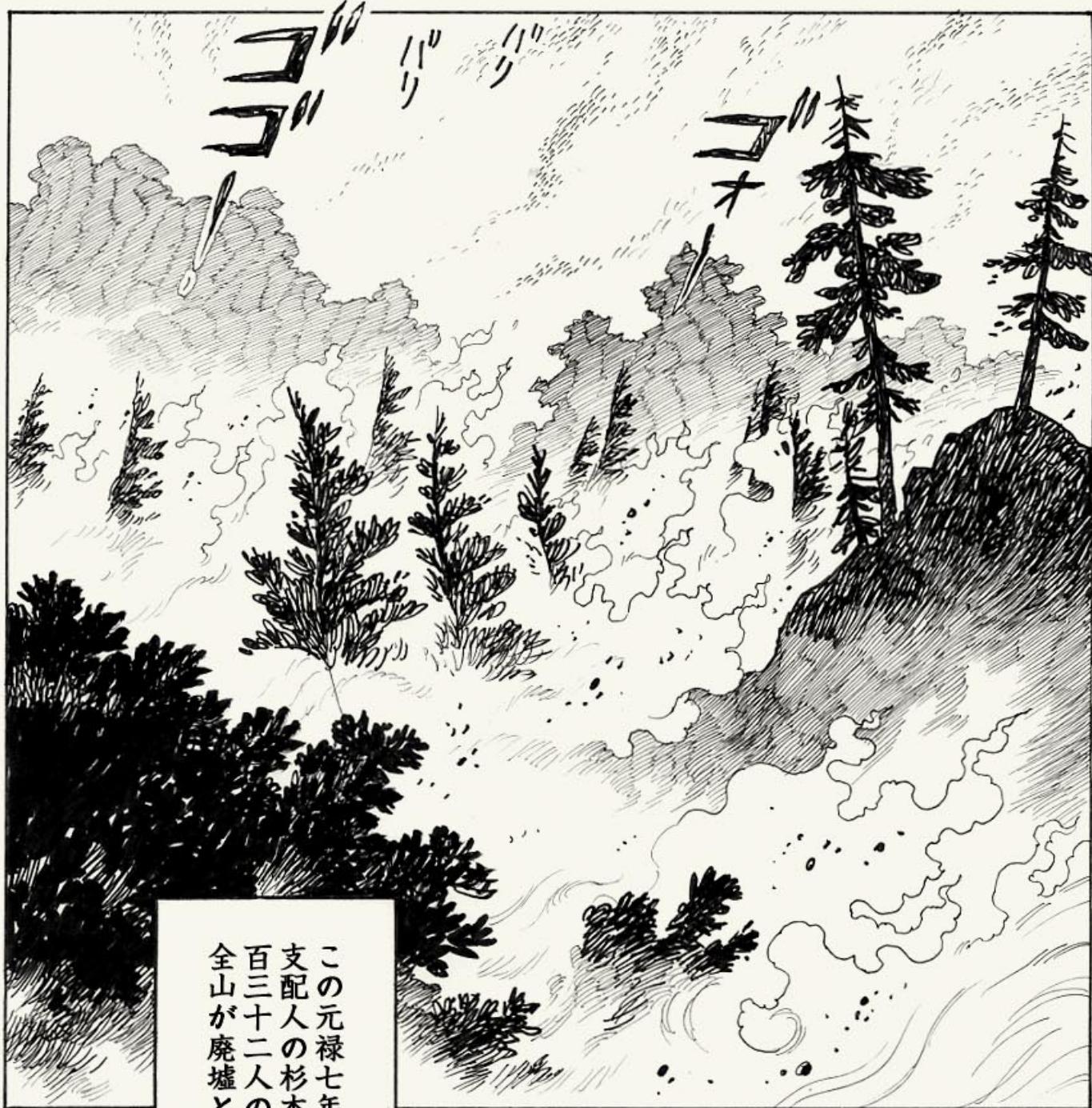


そして初年度の生銅高は、
約三万二千十八斤
(約19トン)で、このまま
順調に参ると思われた：
元禄七年(1694)夏、
思いもよらない事が
起こつてしまつたのです。





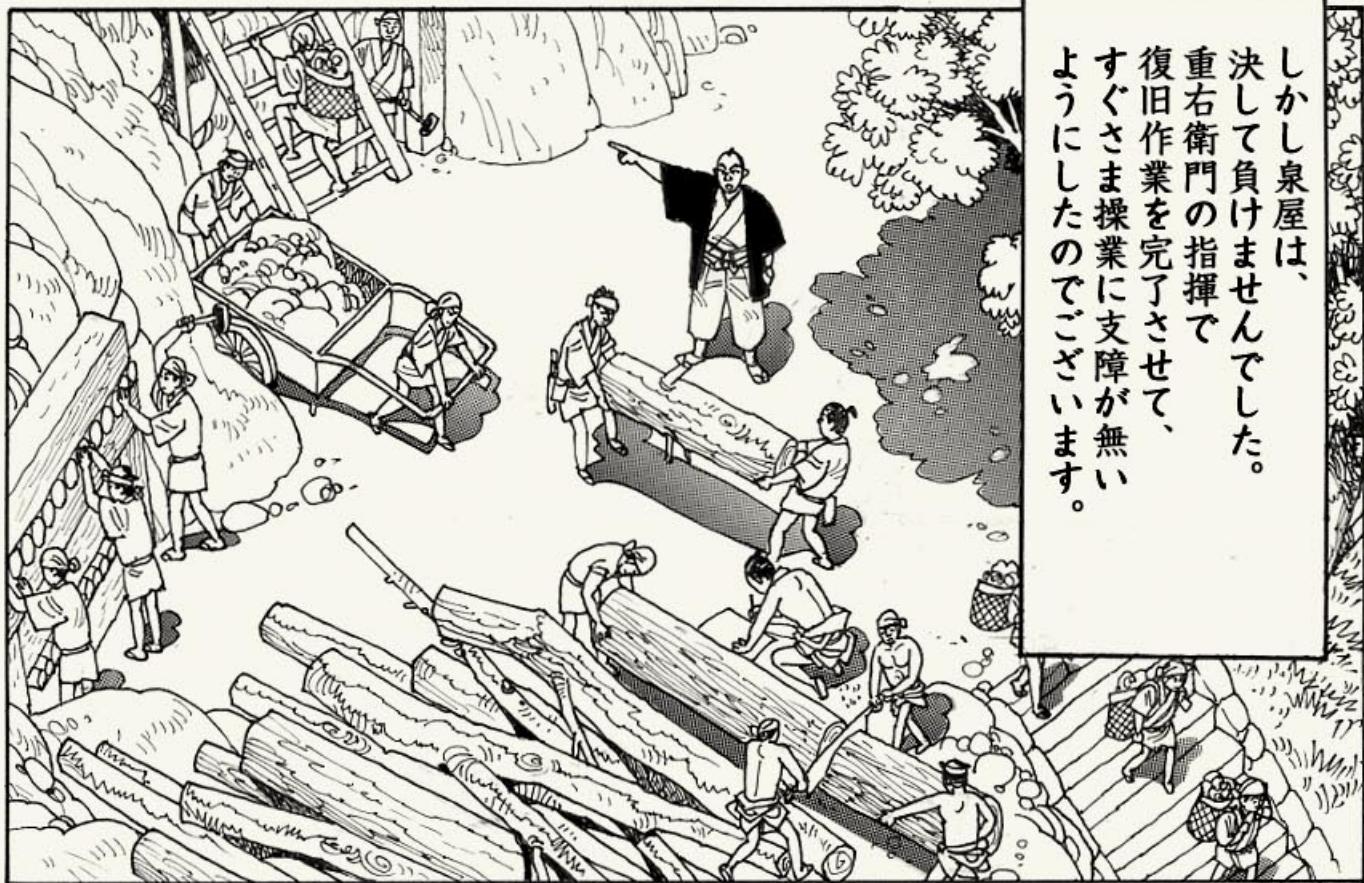




この元禄七年の別子銅山大火で、
支配人の杉本助七以下、
百三十二人の尊い命を奪われ、
全山が廃墟となつてしましました。



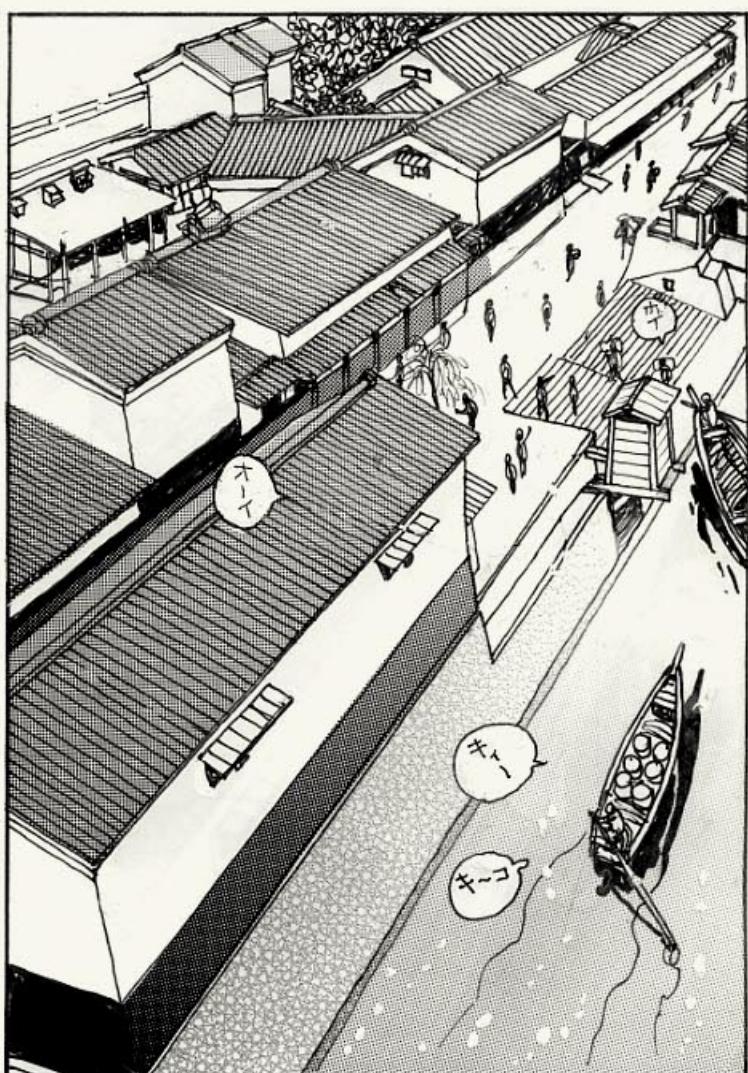
しかし泉屋は、
決して負けませんでした。
重右衛門の指揮で
復旧作業を完了させて、
すぐさま操業に支障が無い
ようにしたのでござります。



そして泉屋では、
この元禄七年の大�の殉職者、
百三十二人を手厚く葬り、
一祠を建てて供養する蘭塔場らんとうばを設け、
以後、職に殉じた御靈を合祀し、
いつまでもいつまでも：供養を
かかさないことと致しました。

再開した別子銅山の産銅量は、
順調に増加し、大火の翌年
元禄八年（1695）には、百万斤
(600トン)を越えたのです。





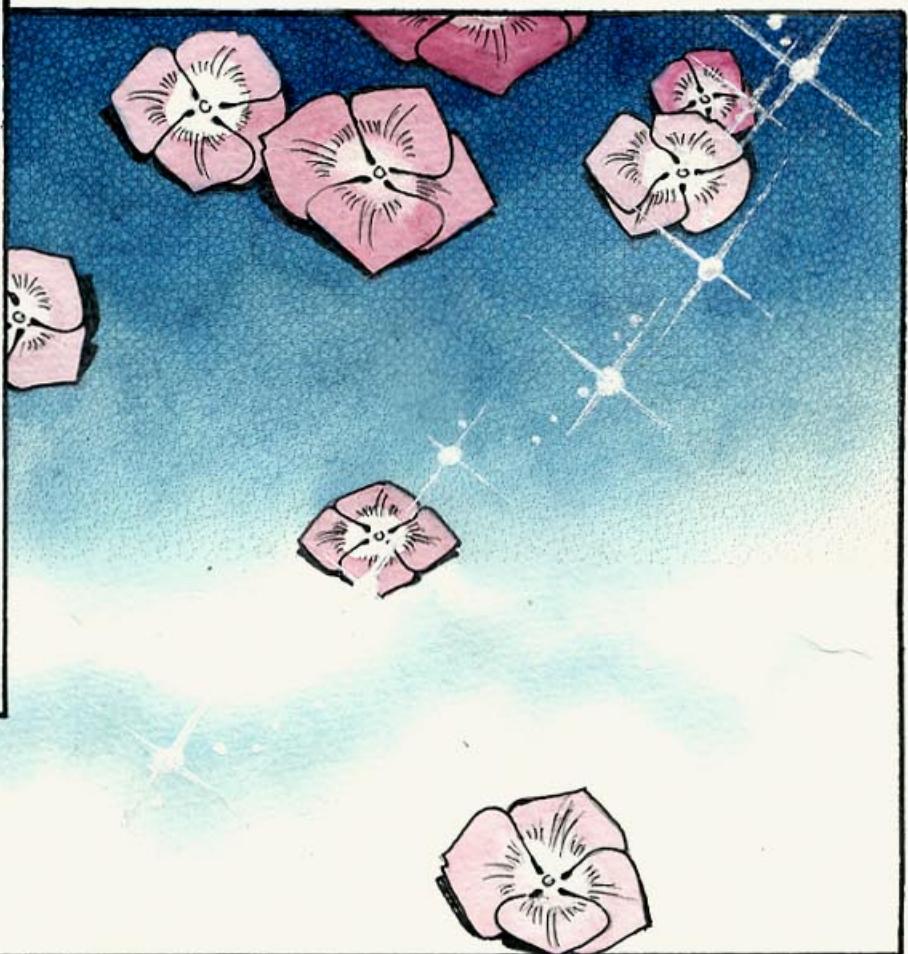


幕府からなんとしても
別子銅山の永代稼業の
お許しを得るんです。
この泉屋で
働く者たちのために、
そしてこの国のために。

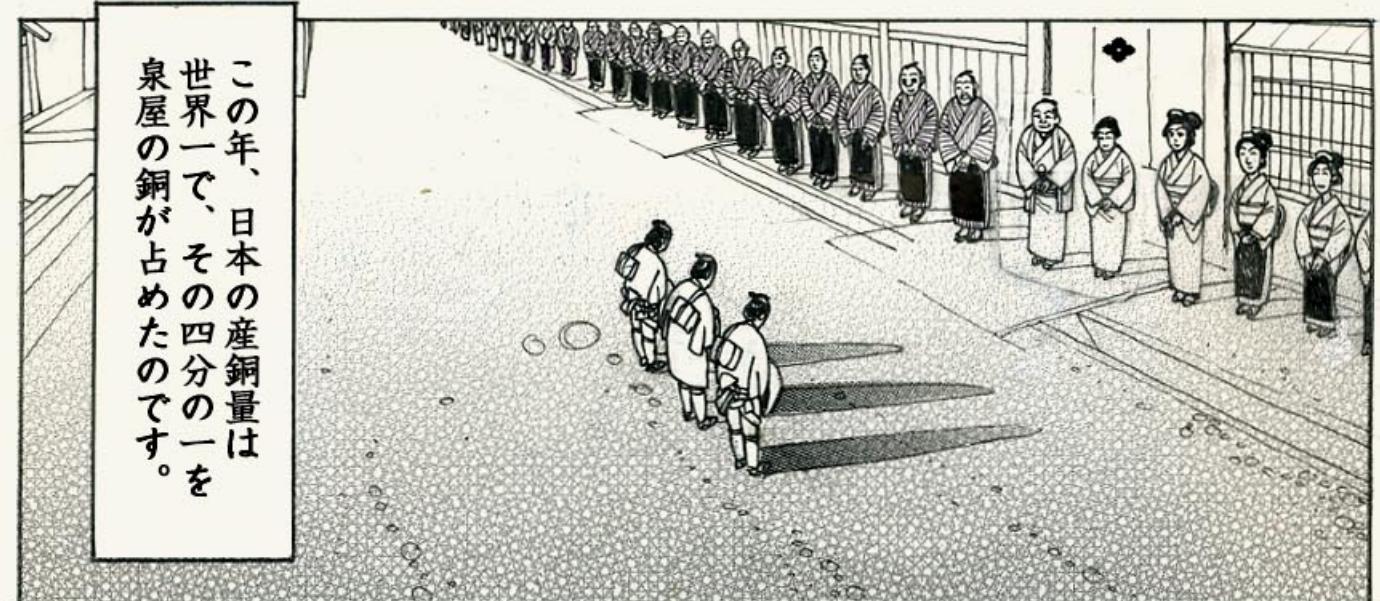


おばばさま…

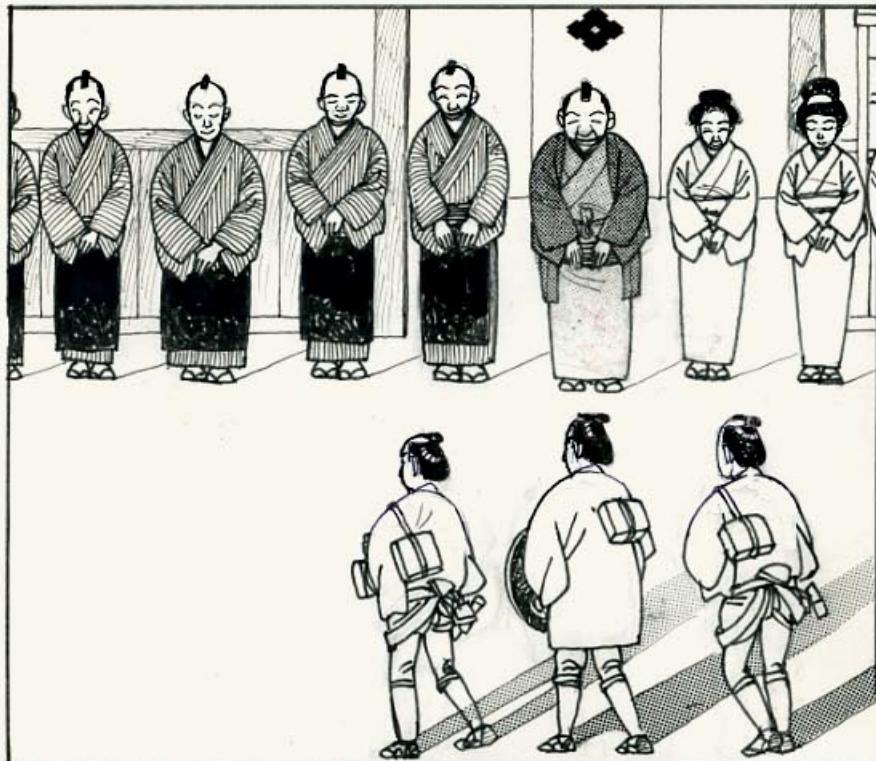
私、住友亀は、元禄十年六月、八十九歳で文殊院様や二人の夫政以と友以の待つ黄泉の国へ旅立ちました。孫の住友四代友芳が別子銅山の永代稼業を得ると信じて…。



この年、日本の産銅量は世界一で、その四分の一を泉屋の銅が占めたのです。



おばばさま。
友芳はこれより江戸へ下り、
幕府のご要望で勘定奉行の
荻原重秀様に銅山振興策を答申し、
同時に別子銅山永代稼業を願い、
必ずや得て参ります。



泉屋で働く人たちの幸せ、
そして、
この国の幸せを願つた亀

その想いは、
友芳に引き継がれ、
江戸へ向かつたのだが
——。